

L. J. Beeston and Stacy Aumonier Detective Stories

2019

Edited by Tsukasa Yokoi

目次

〈L・J・ピーストン集〉

ヴォルツリオの審問 7

東方の宝 15

人間豹 31

約束の刻限 51

敵 69

パイプ 89

犯罪の氷の道 111

赤い窓掛<sup>カーテン</sup> 133

〈ステイシー・オーモニア集〉

犯罪の偶発性 153

オピンコットが自分を発見した話 179

暗い廊下 209

ブレースガードル嬢 239

撓<sup>た</sup>ゆまぬ母 261

墜落 281

至妙の殺人 307

昔やいづこ 323

編者解題 347

## 凡例

- 一、「仮名づかい」は、「現代仮名遣い」（昭和六一年七月一日内閣告示第一号）にあらためた。
- 一、漢字の表記については、原則として「常用漢字表」に従って底本の表記をあらため、表外漢字は、底本の表記を尊重した。ただし人名漢字については適宜慣例に従った。
- 一、難読漢字については、現代仮名遣いでルビを付した。
- 一、極端な当て字と思われるもの及び指示語、副詞、接続詞等は適宜仮名に改めた。ただし意図的な当て字、作者特有の当て字は底本表記のままとした。
- 一、あきらかな誤植は訂正した。
- 一、今日の人権意識に照らして不当・不適切と思われる語句や表現がみられる箇所もあるが、時代的背景と作品の価値に鑑み、修正・削除はおこなわなかった。
- 一、作品標題は、底本の仮名づかいを尊重した。漢字については、常用漢字表にある漢字は同表に従って字体をあらためたが、それ以外の漢字は底本の字体のままとした。

ヴォルツリオの審問

ラインガーは五月蠅うるさそうにウイリアムズの葉巻の煙を手で払って、

「ヴォルツリオが来ない。もう十五分も過ぎているんだ。困ったもんだなあ」と云った。

するとプロデイが、「恰度十二分過ぎてちやうどいるんだ。もう来るだろう。この部屋は馬鹿に寒いね」と云って足で石炭入をガラガラ揺すって、「こんなに遅くなって火をたくと小使が文句を云うから困ったものだ。ヴォルツリオが時間を十時になんて定めたからだよ」

ラインガーは手を上げて、「おや！ あの足音はそうじゃないかしら！」と注意した。

強い手が扉ドアの把手ハンドルを握ったと思うとヴォルツリオが部屋には入ってきた。彼は鋭い眼付で三人を見ながら、「やあ、皆んな来ているね。僕は少し遅くなった」と云った。

彼は弁解なんかしないで主人らしい態度で話した。広い肩の上の短かい厚い外套は雨にぬれて光っている。彼は帽子を脱いで滴しずくを振るい落して、

「素晴らしい雨だ」と云った。

プロデイは、眼鏡をはずしてハンカチで玉を磨きつつ、「何か良い話があるのか、ヴォルツリオ？」と訊ねた。

「良いにせよ悪いにせよ、ヴォルツリオは何か話すだろうよ」とウイリアムズが葉巻の吸口から繊維をつまみ取った。

「まず第一に皆がここへ集まった用件、即ちクレイプール公爵夫人のダイヤの件だが、明日の晩の下

「ヴァー街の夜会には夫人が有りつたけの宝石を着けて来るのだ。そこを急用で呼び出して表に用意してある僕等のタクシーに乗せるといふ段取だ——だから訳はないんだ。しかし皆んなよほど用心していないくちやならないよ」

「君が来るまでに話していたところなんだ。だからもう皆んな用意が出来ているようなものなんだ」とウイリアムズが云った。

ヴォルツリオは椅子にふんぞり返つて気味の悪い微笑を洩しながら小さい黒い口髭を動かした。

「ようなものだ？ ようなものだと云うのは口先だけだ。本当のことを云うと、この計画は闇夜の爆裂弾のように破裂したんだ。ところが悪いことにはそればかりじゃない」

一同がしんと静まり返ると彼は紙片を取出して、「スカルスから僕に來た暗号の手紙だ。プロデイ、読んだら次々へ廻してくれたまえ」

プロデイは一分とかからない中に読み終つて、「馬鹿野郎！」と云った。それからラインガーに渡した。

「大失敗だ！ 実に大失敗だ！」と心からいまいましそうにラインガーが云った。

次に手にとつたウイリアムズはちよつと目をやると顔を真赤にして「スカルスがこう云うのなら本当かも知れない、畜生！」と呟やいた。

ヴォルツリオは卓子の端に両手をたたんで、「僕はこの手紙を三十分前に受け取つたんだがこの手紙でみると我々の中の誰かが警察に密告したんだ。だから今夜、この場で、悪い奴を調べて——そいつを殺すのだ！ 解つたらうね！ 問題は誰が密告したかということだ。ラインガー君か？」

「そんな事があるものか」

「ウイリアムズ、君か？」

「いいえ」

「プロ 데이！ 君が密告したのか？」

「決してそんな事はない」

ヴォルツリオは、ポケットからピストルを出して卓子の上に置いた。長い沈黙が続いた。三人はヴォルツリオを見詰めた。聞こえるものは鬱陶しい夜の雨の音ばかりだ。

すると、ウイリアムズが口を開いて、

「君は何か隠しているのか、ヴォルツリオ？」

「隠しているって？」

「我々を審問する材料でも持っているのかと云うんだ？」

「そんなものはありやしない。今みんなが読んだスカールスの手紙に書いてあることしか解っていないんだ」

「じゃどうして調べるんだ？」

「しッ、黙った！」とヴォルツリオが手を上げた。

一同が石のように堅くなった。半分ばかりだったが何も聞こえない。

「何か物音がしたか？」と灰のように白くなったプロデイが訊いた。

「誰か外にいるよ」と聞こえるか聞こえないほどの声でヴォルツリオが囁いた。その声が終らない中に銃を卸してある扉の外で誰かがこつこつと叩いた。

「もう駄目だ！ みんなやられた！ この中の誰かが謀し合わせたのだ！」とラインガーが云った。

犯罪の氷の道



オリーヴ嬢がクラージス街の私方わたくしかたに訪ねて来て、若者ファーニーが二年の刑を終えて出獄したことを知らしてくれた。

私はオリーヴ嬢ほど可愛らしい女をまだ見たことがない。無論、欠点を捜せば幾らもある。けれども彼女ほど愛嬌があつて、心まで水晶のように澄んだ女は珍らしい。私は若者ファーニーが刑務所にいる二ケ年の間、できるだけ彼女に会うことを避けていた。それは私が彼女を恋するようになることを怖れていたからだろうか？

いや、そうではない。私は彼女の幸福に大打撃を与えた。それ以来彼女はすっかり変つてきた。しかも彼女は私が彼女の幸福に打撃を与えたことも知らずに、私に厚意を持っている——

この私に！

彼女は私の部屋に入って、椅子に腰かけると、静かに私を見入りながら、別に興奮した風も苦痛の色も見せず、低い落着いた声で、ファーニーが三週間前に放免状を貰つて刑務所を出たこと、ちよつと帰つて直ぐまた行方不明になったこと、それから苦心して探した結果、今カムデンの或る見すばらしい場末の穢ない屋根裏に住んでいるのを突き止めたことなどを物語つた。

「マア、そんな処に住んでいらつしやるのですよ」とオリーヴ嬢が言つた、「あまり長い間、暗い処

暗い廊下

レイマンド・カルヴァリーは、耳慣れた鍵の音を聞くと思わず、「これが最後だ！」と心に呟いた。今度監房が開いたら、その時こそ彼は自由の身となるのだ、罪はつぐなわれた、彼は今までこの瞬間が来ようとは思わなかった。日となく、夜となく、年となく、今日の日の来る事を信じようとしても、どうしても信ずることが出来なかった。彼は興奮で胸苦しくなったので、寝台に坐って両手に顔を埋めた。自由！ 真の自由！ 今から数時間で社会に出られるのだ。そう思うと、なんだか未知の物に対する時のような一種の恐怖を感じないでもなかった。そして、二十年もそれ以上も刑務所で暮した四人の中に終には社会より刑務所を好くようになる者がよくあるが、それらの人たちの気持に同情が持てるような気がした。とにかく、彼等にとっては刑務所の方が様子が解っていて親しみがある。なのに社会は全く不案内で、どう手出しをして可いか見当がつかないのだ。

けれども彼はまだ四十六で、この刑務所に僅か五年と三ヶ月いたばかりだ。僅か五年と三ヶ月！それが彼には五千年と三百ヶ月のように思われた。初めの頃は、狂人になるんじゃないかと思うことがよくあった。そして短かい三十分が永劫のように長く思われた。

「この三十分の次にまた三十分がある。その三十分が沢山積つて一日と一晚になり、それがまた何度も繰り返して一週間となり、また繰り返して一ヶ月となり、氣候が変り冬になり夏になり、またまた冬に帰り夏になって五度氣候が変るのだ。その間には自分も社会も変つて行き、総ての欲望から切り放されていなければならぬ。どうしてそれが辛抱できよう！ ああ、神よ！」

けれども彼は辛抱した。来るべきものは来た。総ての自然の現れの中で、一番順応性に富んでいるものは人間である。彼は月日が経つにつれて自分で自分の性質を変えて刑務所の生活に順応するように知らず識らず勤めていることに気がついた。時には自分は幸福だと思ふことすらあった。それは多分、肉体的に調子がよかつたから、自然そう感じられるようになったのであろう。実際刑務所の生活は彼に適していた。彼は海拔千四百呎フィートのダートムーアの石切場や農園で一日数時間の戸外労働を余儀なくせられたが、そこでは空気が強壯剤であつた。彼は質素ではあるが適當な食物をとつて、晩はいつも五時に仕事をしまつた。彼の過失の原因の一つなるアルコールは一滴も口にすることが出来ない。最後の二年間は一日二回、三十分ずつ喫煙を許されたが、それもそれ以上の度は過ぎせなかつた。総てが規則づくめで秩序立っている上に責任と言ふものがないから心配がない。従つて体の調子もよかつた。こんなに体の調子の好かつたことは、学校を出て以来のことだつた。彼は一定の時間に大工の仕事をしたが、木の匂いが好きな上に、人間の使うものを拵らえるのかと思ふとそれが何となく愉快だつた。どうかすると刑務所内の総ての雰囲気雰囲気が親しみのある満足なものに思えることがしばしばあつたが、そんな時にはちよつとした他人の厚意が親切な行いのように誇張して感じられるのであつた。読書の機会もあつたが、大部分は思索に費した。そして彼が一番強く感じたことは「俺はいつまでも自分を犯人だと思わないようにしよう」ということだつた。自尊心を養うためには随分骨を折つた。それがためには、外観の身だしなみにさえ気をつけた。この頃は刑務所でも考えて囚人に安全剃刀を使わせたり髪髪の刈方を自由に放任したりしたので、レイマンドもその規則を利用して毎日髭を剃り白髪まじりの髪を櫛けずり、時には食事時に渡る少量のバタを髪に付けなぞした。彼の皮膚は太陽と風と風にさらされて好い色になつた。つまり肉体的に言つたら、彼は立派な男とな

って社会に出るのだ。けれども精神的に言ったらどうだろう？　ここに難問題がある。彼の心は言う。「自分は罪を犯した。ずぼらをした。意志の弱いために馬鹿なことをした。そして自分で汗を流さずに大金を得ようとした。自分は不正直だった。そして捕えられて罰せられて、自分はその罪に服した。その点で罪はつぐなわれたのだ。しかし今度は物事がはつきり見えだした。もう不正直な男にならない。また不正直になろうと思っても、アルコールの慾を失ったと同様、不正直に對する慾もなくなってしまった。自分は正しい市民になりたいのだが、社会がそれを許してくれるだろうか？　社会は自分をどう待遇するだろう？　第一我が子にどんな顔をして会ったら可いだろうか？」

ここまで考えてくると思わず声を立てて呻いた。それと言うのも、その子は彼の体から分れた唯一の生命いのちだったからである。

そもそもこのレイマンドは、フレンチチャーチ街に店を持つ化学薬品輸入商で、二十二の時或るお金持の船プロカーの娘と結婚したのであるが、その結婚は間もなく二人の氣質が合わぬため失敗であったことが解った。けれども次の年に子が生れたので、別れる訳にも行かない。と言って二人の間に烈しい争いでもあったかと言うにそうではなく、ただ小さい事が重なって溝を作ったと云うまでである。彼等は長い年月が経つにつれ、お互の仲に共通の点が少いことを覺り、それと同時に両方からそれを埋め合わせるように勤めた。随分骨の折れる仲だったのだ。そういう風に二人は大した争いもしないで来たが、ただ子供の育てかたについては無遠慮に争った。もともとこの争いもごく穏かに行われたことは事実だ。

彼の妻は交際好きだからいつも社交界に入りびたり、馬に乗ったり、獵に行ったり、ゴルフをやったり、外国の避暑地に出かけたり、競馬にこったりした。レイマンドの方は本を読んだり、田舎を歩

いたり、倫敦ロンドンの酒場や田舎の宿屋などで見られる小さい社交団体に加わったりするのが好きであった。妻が倫敦に帰って彼と同じ家に住むような事があっても、二人は合意の上で別々の道を歩いていた。

妻は大抵外国にいるし、息子は学校にるので、ラッセル・スクエアの広い家に一人住むレイマンドはいつも淋しかった。そこでその淋しさをまぎらすために彼は自然と倶楽部クラブに親しむようになり、いつも五六の倶楽部に入入りして、また皆んなから理想的の倶楽部員と見られていた。それと言うのも、彼が親切で、金離れがよくて、座談に巧みだったからである。彼は昼食と夕食を倶楽部で済ますばかりか、食事と食事の間にも倶楽部を訪れた。そして彼等の仲間の多くのように、別に酔うと言うほどでもないが、ただ社交を名にして始終お酒に親しんだ。商売は順調に行くし、妻は妻で別に財産を持つていたから、彼はお金のことには心配する必要がなかった。ところが或る日、彼はアルゼンチンの商人の殆ど詐欺と言っても可いような手にかかって、硝酸塩の取引で大変な損をした。彼はそのため大打撃を受け、それから起るいろんな心配をまぎらすために前より一層足しげく倶楽部や酒場に入入りしだした。そして或る日のこと、それらの倶楽部の一つで不幸にもマクス・ロールと言う男と近づきになった。世間にはよく一定の国籍も年齢も職業もないかわりに、総ての国民と年齢と職業の悪徳を一人にかねそなえ、それを一種拒みがい魅力と才能で隠したような男があるものだ。このマクスがそれだった。彼は詐欺師としてこの世に生れたような男で、世間の人は彼に欺かれていると知りつつも、それをどうすることも出来なかった。そして後になっても彼を許さずいられぬほど、それほど彼は上手で、かつ魅力を持つていた。

そしてマクスの手にかかったレイマンドは一も二もなく壺師の手に握られた粘土のようになり、二人は一緒に昼食や夕食を食べ、玉を突き、夜の倶楽部に入入りした。マクスは外国の珍らしい土地を

見、いろんな人と交っている上に、話が頗る上手だった。

彼が災難にあつたのは、息子のレーフを劍橋ケンブリッジに入れるべきか牛津オックスフォードに入れるべきかについて夫婦意見の衝突を見てから間もなくのことであつた。けれども妻はいつも自分の思う通りを実行する質だったので、この時もレーフを劍橋へ入れてしまった。そしてレーフが休暇で帰る日まで、妻もピアリツで暮すことになつたので、一人残つたレイマンドはますますだらしなくなつたり他人から金を借りたりした。妻から借りれば好かつたのだが、それは彼の自負心が許さなかつた。そして彼が自棄やけ気味になつてゐる或る晩のこと、例のマクスが旨く口説いて彼を誘惑した。口説かれてみるとそれがいかにも易いことのように思われた。どうしてこんな簡単な旨い仕事を、これまで他人がやらなかつたのか、それが不思議にさえ思われた。その仕事と言うのは他でもない。適当な時機を見はからつて、二つの会社に株を行つたり戻つたりさせて株が暴騰したように見せかけるのであつた。マクスの話を聞いたところでは、それが不正直な行為とはどうしても思われなかつた。そして彼等は二人で利益を二分することを約した。ところがマクスは自分の利益だけ取るとそれから数日たつてふいと姿を隠し、それきり帰つて来なくなつた。後に取り残されたレイマンドは、自分の位置を説明することが出来なかつた。そして長い間商法に照らされ、複雑な調査をされた後、詐欺取罪の名目で七年の刑に処せられ、それが善行で軽減されて五年三ヶ月になつたのである。

しかし、どうして我が子に会つたらよからう？ 妻は案外旨く留守中のことを処理してくれた。そして三ヶ月に一度は形式的ではあるが短い手紙をよこして、家のこと、子供のことを何くれとなく知らして来た。そしてそれほど金に困つていて何故自分に打明けてくれなかつた。今度帰つたら必ず自分の金で貴方を元の商売に返してみせるなぞと書いた。父の犯罪なぞは少しも知らぬ子供は、いかに

も学生らしいことばかり書いてよこした。彼は父の留守中は外国にいる母の元に行ったり、遠いサツフォークの村の家庭教師の家で暮らしたりした。我が子？ レイマンドは夜分なぞ監房の寢床に横になって、よく我が子レーフのことを思って苦しさに呻いた。彼はレーフのいろんな年頃の姿を胸に描いた。やっと歩き出して自分の腕に抱かれていた頃のこと、廻らぬ舌で饒舌りだした頃のこと、父の姿を見つけると走って来て縋りついた頃のこと、その頃のレーフが「お父さん！ お父さん！」と呼ぶ子供らしい声は今も彼の耳に残っている。それから彼がレーフにいろんな事を教えてやると、間もなく小学校に通うようになった。レーフが学校から帰って父に質問なぞした時、どんなに我が子を誇らしく思っただろう！ 彼は赤いジャケットに鞆を肩にかけた小学時代のレーフが、体を少し振るようにして歩きながら街を帰って来る姿を思い出した。レーフは父を見つけると熱心な可愛らしい顔を、嬉しそうに輝かした。そして二人は手を取り合って散歩に行き、小鳥や、木や、遊戯の話をした。レーフは父を尊敬し、かつ愛した。同時にレーフは母をも尊敬し、かつ愛した。子供の心には父と母の区別はなかった。レイマンドと妻は子供を中間に置いて妥協し合い、同時に嫉妬も感じていた。レイマンドは子供の心が次第に生長して行くのを眺めるのが楽しみであった。

彼は自分が破滅に陥って法廷に立ち、裁判官が優しい声で七年の刑を申し渡すのを聞いた時、何よりもまず我が子レーフのことを思い出した。そしてレーフが熱心な顔をして、「お父さん、一体どうしたの？」と訊く声を心の内で聞いた。

レーフは父が犯人だとは、どうしても信じなかった。そんな事は初めから解らなかつたのだ。また子供に解るような簡単な事件でもなかつた。レイマンドは弁解は出来ても、弁護は出来なかつた。その点は彼自身にも解らなかつたのだ。彼はただ前後をわきまえず、間違つた書類に署名したまでだ。



それだけの弁解で子供は満足してくれた。しかし法律は子供より嚴格だ。法律は彼に弁解の余地は与えたが、法文に触れる処では少しも容赦しなかった。

とは言え悲劇の日からもう五年も経った今日では、レーフも物事をわきまえたに違いない。レーフはもう子供ではない。恐らく彼は世間の人たちから父の過失を、出来るだけ不快にして話して聞かされただろう。またレーフの方でもそれを聞きたがつたであろう——おお、熱心に！ だからレーフも今度は昔のように、

「お父さん、一体どうしたの？」と訊きはすまい。

多分その声さえ今は変っているだろう。ああ、神よ！

彼は朝の光が窓から差し込むまで、うつらうつらと半睡状態で過ごしたが、明方からぐっすり寝込んで、例の耳慣れた鍵音がして扉が開くまで目が醒めなかった。

彼は静かに服を着て顔を洗って朝食を済ました。次に或る部屋につれ行かれ、そこでいろんな手続きをした。久しぶりに昔の自分の服を見た時には、咽喉もとに塊が上つて来るような気がした。いえばこれが社会との最初の対面だ。しかしまだ鎖や鍵がガチャガチャ鳴っている看守につれられて、中庭を通つたら、蹄鉄工場に行く一群の囚人に出会った。それらの囚人は皆んな彼と親しい仲だった。彼等はまた十年以上もいなければならぬのに、彼はもう二分間で外に出るのだ！ そう思うと彼は他の囚人たちも同様に持つ権利のあるものを、自分一人で独占したような、何だかすまぬような気がしてならなかった。外側の門の処まで来ると、送ってきた太つちよの老看守が、

「じゃア、御機嫌よう！」と言った。

この意外な親切な言葉に面喰らった彼は、返事さえ出来なかった。忽ち彼の胸の底から燐みの心

昔やとづしん

両親たちの会合は大成功にちがいがなかった。アレック・グリグズは、バルバラと結婚してから七年にもなるのだが、いつも彼の両親が米国から訪ねて来ると、恰度その時、彼女の両親が海外旅行で不在だったりして、今まで会う機会が一度もなかったのである。だが、それも無理はなかった。なるほど彼の老いたる両親ジョン・グリグズ夫妻は厳格な性分でいつも米国から来る前には予告したには違いなかったが、バルバラの両親は徹底的な旅行好きで、まがなすぎがな、始終家を空けていたのである。バルバラの父ウエストン大佐は、七十二になるのだが、まだ壯者をしのぐ元気で、思い立ったらいつでもすぐに旅行に出かけねばいられぬ性分だった。

だが、今度こそはその機会が来た。老グリグズ夫妻は二ヶ月を英国で暮すために、はるばる米国のフロリダからやって来た。ウエストン大佐夫妻は、谷間の向うの近くの家にいる。

時は八月、英国でも珍らしい暑さ、その上天気が好かった。当日は妻バルバラは三人の子供の世話をし、また良人アレックは自動車でテリンガースト町の自分がやっている農具工場に行ってしまったので、自然、四人の老いたる両親たちは親密に話し合った。最初はバルバラは心配でならなかった。こうした会合というものは、どんな結果になるか解らぬ。だが、彼女はすぐに安心した。グリグズ老夫人とウエストン老夫人は、子や孫の愛にひかされてすぐ親密になり、老紳士たちも、初めて会ったと思われぬほどの仲になった。両方とも世界の方々を歩いているので、昼は緑の木蔭、夜はヴェランダの椅子の上で、大佐はパイプ、ジョン・グリグズは黒い葉巻を啣えて、世間話の花を次から次と咲

かせ、もし彼ら二人の他に誰もいなかったら、二人は徹夜しても話し続けるであろうと思われた。バラバラは嬉しくて堪らない。すべてが大成功であった。

アレックの農具製造工場は景気がよくて、どんどん収入が増した。だが彼ら夫妻は、サセックス州でも減多にないようなその立派な屋敷が、工場の収入ばかりで保っているような風は、近所の人たちに向って見せなかった。その屋敷というのは、高い処にあって、北と東が松の深林トウリに覆われ、南にはテリンガースト町の谷間がはるかに見下せて、その向うに海があった。彼らは元古い百姓家だったこの家を買込んで手入れをして、今では古めかしい品ひんもあれば、大きくて晴れやかで、気持のいい近代の建築家を作ったような処もある住宅としたのだ。薔薇畑、オランダ風の庭、水泳プール、二つのテニスコート、みんなある。だが一番いい処は恐らく食堂のそばの広い散歩場であろう。そこには、つつじ、クレマチス、ジャスマインなどで飾った菩提樹ボウダイジュの四阿シヤがあり、大きな荒い石を敷いた土地の隙間には赤、白、青の、可愛らしい綺麗な花が咲いている。

この屋敷にお金を掛けたのが、アレックの父ジョン・グリグズであることは言うまでもない。彼は富豪で、アレックはその一人息子だ。グリグズ家の人々は、この近在で評判がよくて、彼の父を羨みはしても、「アメリカの富豪」としての彼を褒めぬ者はなかった。近所の人は皆んなアレックの家で歓待された。だが老グリグズが金満家だろうが、金満家でなかるうが、そんなことはこの話には関係ない。関係があるのは、テリンガースト町の人は誰も知らないけれど——いや知っている人はごく少ないけれど、彼は純粹の米国人ではなくて、ただ国籍の上だけは米国人であると言うことだ。彼の妻はコロンビア大学の物理学の教授の娘であるが、波瀾に富んだ彼の経歴は英国人は誰も知らない。彼が莫大の富を得たのは聖ルイズセントルイズにおいてであった。そこで彼はまず漂白剤の製造に手を出し、次にグ

リグズ肥料の専売特許を得て、沢山の金を得た。彼が、「正直グリグズ」と言う綽名を得たのも、この町においてであった。この綽名を一番自慢に思ったのは、その子のアレックだった。アレックは、たとい英国の貴族の称号を父からゆずり受けたとしても、この父親にぴったり当てはまった簡単な綽名を受けつぐこと以上に喜びはしないであろう。彼は時々、自分の広大な邸宅を見て気が咎めることもあったが、そんな場合には、この家に住むということは、これらのものを買ってくれた父「正直グリグズ」を満足させる道だということを考えて自ら慰めた。

はじめの二週間がほどは、ひどい暑気のためにグリグズの人たちは滅多に外に出なかつたが、大佐夫妻は熱帯に慣れていたので夕方になると出ることもあった。そして日が暮れると、二人の老紳士は球転がしの遊戯をし、次に毎晩のお定りの例の世間話に共鳴し合う。三週間目には大佐が二三の会議に出席するために倫敦へ行かなければならなかつたが、老グリグズ氏は自動車でそれを駅まで見送って行き、ちよつと感傷的な別れをした。その際、大佐は貴方と意気投合した後では、倫敦の倶楽部へ行つても退屈でつまらないだろうと云い、老グリグズは待つてゐるから、一日も早く帰つて来なさいと云つた。

さて、大佐が老グリグズから受けた最も強い印象は、彼が生れつきの楽道家だということだ。老グリグズが楽道家だことは誰でもすぐ解る。彼は眞の楽道家のみが持つ眼を持つてゐる。六十五にもなつて随分世間というものを見てゐるのだから、それでも子供のような張りのある声を持つてゐる。若々しい熱を持ち、印象に敏感で、いつも興味を持つて他人の話を聴く。だから倫敦から帰つた晩の大佐が、彼の様子の変つてゐるのを不思議に思つたのも無理はないのだ。別れる時のグリグズはいつもの快活な彼であつたが、金曜日に帰つてみると、どこやらその物越しに打沈んだ変なところが見え

る。ちよつと見では解らないが、よく気をつけてみると、確に変わっているような気がする。愛想がよくて、よく他人の言葉に耳を傾ける処は同じだが、何だか他のことを考え込んでいるようだ。しかもその考えている事は、大佐の留守中のできごとと違くない。で、大佐は娘バルバラを呼んで訊ねてみたが、彼女はそんなことは何も知らない。米国からも留守中に手紙が来た様子はない。では何だろう? ただ、バルバラの話によれば、グリグズは一人で自動車を運転して二晩つづけて近郊の散歩に出たそうだ。大佐は何が何だかさっぱり解らなくなった。そして娘と別れて元の散歩場に帰ると夕闇の中に老友が一人坐っている。彼は単刀直入を欲した。話してみれば雲が晴れるだろう。

「ねえ、ジョンさん、晩方自動車でおでかけになったそうですが、どこにいらしたのですか？」  
老グリグズは葉巻を啣くわえたまま、

「なに、一二度近くを廻ってみましたですよ——別に当てはない——ただ——」

口籠つて遙かな谷間に眼をやり、しばらくしてまた言葉をつづける。

「海岸へ出てタイスハーストとブラインを通り、帰りにはワントニーやグレンデイシャムの方を廻つただけです——別に——」

心苦しい沈黙。大佐はその遠乗りについてもっと詳しい話が聞きたかったが、口を出して相手の言葉を遮りなくなかったので、ただ「うん、うん」と呟つぶきながら、パイプに煙草を詰めた。やがて老グリグズは椅子から立上り、庭を歩いて、明るい窓のそばに近より、客間を覗いてみた。客間では今しがた打集うちつどった家族のものどもが、毎夜の慣わしとなった骨牌カルタをこれから始める処で、三人の女たちは子供の育てかたや服の仕立方について喋り、アレック一人が骨牌の世話をして、皆んな話になつて、切札が何やら、勝負の点が何やらそんなことには気を止めていないらしい。老グリグズはこっ

## 編者解題

妹尾アキ夫のピーストン、オーモニア受容について

横井 司（ミステリ評論家）

妹尾アキ夫（本名・韶夫<sup>あきお</sup>。一八九二～一九六二）が、第二次世界大戦前および戦後にかけて数多くの訳筆をふるい、日本の探偵小説文壇に寄与したことは、先に論創ミステリ叢書から刊行された『妹尾アキ夫探偵小説選』（二〇一二）の解題で述べた通りである。早稲田大学文学部英文学科卒業後、親の決めた会社に就職したものの、一日で辞めてしまい、翻訳家を志した妹尾は、英文学科の同期生・植村宗一（直木三十五）が鷺尾浩（鷺尾雨工）と共に、翻訳出版を主とする冬夏社を創業した際の翻訳陣にも加わっており、『煙』、『曠野のりや』といったツルゲーネフ作品の翻訳を担当している。その後、鷺尾浩は植村宗一と袂を分かち、鷺尾浩が社名を引き継ぎ、植村は人間社を興した。同社からは一九二〇年に里見淳、久米正雄らによって雑誌『人間』が創刊され、妹尾はその編集を担当する傍ら、同誌の一九二一年十一月号にリタ・ウエルマンの戯曲「三味線の糸」を訳載している。一九一八、九年ごろ、やはり英文学科に在席していた森下雨村と知り合っていた妹尾は、雨村の引きによるものであろう、博文館の雑誌に創作や翻訳を寄稿するようになった。妹尾が初めて訳した探偵ものが、本書にも収録したL・J・ピーストン L. J. Beston（一八七四～一九六三、英）の「ヴォルツリオの審問」である。その当時の事を妹尾は次のように回想している。

今から十年ばかり前、森下雨村氏がこれを訳してみよと云つて与えられたのがストランド誌から抜いたピーストンの「ヴォルツリオの訊問」で、それが私の初めて訳した探偵小説だつた。それ以來、ずつと探偵物を訳して来たが、私は初めて「ヴォルツリオ」を訳した時の一種異様の感じを今だに忘れることが出来ない。その時まで大陸の人道主義的な純文芸物ばかり訳してゐた私に取りて何と云ふ驚きだつたらう！ そこには産れたまゝの人間の憎悪、怨恨、復讐、恐怖、争鬪、罪惡がありのまゝに描かれてゐる。それらのものが何の憚る処なく思ひ切つて大空に枝を伸ばしてゐる。私は息が詰るやうな眩惑を覺えた。（ピーストンに就いて『世界探偵小説全集19／ピーストン集』博文館、一九二九・一一）

「ヴォルツリオの審問」は『新青年』一九二二（大正十一）年四月号に掲載されたが、初出時の訳者名義は「天岡虎雄」となつていた。天岡虎雄は、延原謙がコナン・ドイルの『四つの署名』を翻訳した『古城の怪宝』が博文館の『探偵傑作叢書』の第四巻として上梓された際にも使われた名義である。延原はそれを森下雨村の名義で刊行されたと理解しており（「ホームズと卅五年」『東京新聞夕刊』一九五六・一二／二二）、そのことから考えるに、雨村の許に持ち込まれた原稿のハウスネームとして使用されていたのではないかと思われる。

「ヴォルツリオの審問」は『新青年』に掲載されたピーストン作品としては、「マイナスの夜光珠」「シヤロンの燈火」に次ぐ三作目にあたり、以後、妹尾に加え、右の二編を訳した西田政治や、横溝正史、延原謙らが中心となつて、ピーストン作品が『新青年』の誌面を飾ることになる。戦後になつ



て江戸川乱歩が、日本の雑誌に訳された外国人作家の邦訳頻度表を作成した際、ピーストンの邦訳頻度が他の海外作家を引き離して断然高いことを示しているが（「英米の短篇探偵小説吟味」『続・幻影城』早川書房、一九五四）、中でも多くの翻訳を手がけたのが妹尾であった。掲載誌不明の作品もあるし、別名義や無署名の作品もあるため、正確な数は測りたいが、中島河太郎によって「もともと数多く翻訳した」といわれているほどだ（「解説」『ピーストン傑作集』創土社、一九七〇）。ところが妹尾のピーストン評価は、一筋縄ではいかない揺らぎを示している。

ここで、妹尾の書いたピーストンに関する文章で、管見に入ったものをあげておこう。

「ピーストンの特質」『新青年』一九二五年八月号

「ピーストン雑感」同右 \*捕鯨太郎名義

「一方から見たピーストン」『探偵趣味』一九二七年六月号

「ピーストンに就いて」『世界探偵小説全集19』博文館、一九二九年十一月

「ピーストンの作品」『ぶろふいる』一九三六年五月号

「ピーストンに就いて」『人間豹』博文館文庫、一九三九年六月

「ピーストンに就いて」『別冊宝石』31号、一九五三年九月

最初の「ピーストンの特質」は妹尾が『新青年』に初めて寄稿したエッセイで、そこでピーストン作品の特徴として以下の四点をあげていた。『妹尾アキ夫探偵小説選』の解題でも引いておいたが、煩を厭わず再掲しておく

一、「緊張味に富んでゐること」

二、「奇想天外から落ちる式の構想」すなわち「意外の結末」

アネクドット・ド・モダン・デザイン

〔著者〕

L・J・ビーストン

レオパルド・ジョン・ビーストン。1874年、英国ロンドン生まれ。別名にルシアン・デイヴィス、リチャード・キムデン。略歴不詳。1963年死去。

ステイシー・オーモニア

1877年、英国生まれ。処女作「友達」を発表して英国文壇の寵児となった。1928年死去。

〔訳者〕

妹尾アキ夫（せのお・あきお）

1892年、岡山県生まれ。本名・韶夫。別名に胡鉄梅、小原俊一。早稲田大学英文科卒業。ミステリや山岳小説の翻訳を手掛け、作家としても活躍した。1962年死去。

〔編者〕

横井 司（よこい・つかさ）

1962年、石川県生まれ。専修大学大学院文学研究科博士後期課程修了。95年、戦前の探偵小説に関する論考で博士（文学）学位取得。

しみよう さつじん せのお おほんやく  
至妙の殺人 妹尾アキ夫翻訳セレクション

——論創海外ミステリ 240

---

2019年11月5日 初版第1刷印刷

2019年11月15日 初版第1刷発行

著者 L・J・ビーストン、ステイシー・オーモニア

訳者 妹尾アキ夫

編者 横井 司

装丁 奥定泰之

発行人 森下紀夫

発行所 論創社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル

TEL:03-3264-5254 FAX:03-3264-5232 振替口座 00160-1-155266

WEB: <http://www.ronso.co.jp>

印刷・製本 中央精版印刷

組版 フレックスアート

---

ISBN978-4-8460-1834-4

落丁・乱丁本はお取り替えいたします